

きます。こうした出土時の記録は後々の研究で重要な資料となります。発掘した出土品は付近の遺物収蔵倉庫に運ばれます。出土品の多くは破片であり、倉庫ではジグソーパズルのように、これらの破片を接合し、もともとの姿を復元していきます。復元したものは写真撮影、そして図面に記録します。こうした記録を日本に持ち帰り、研究を重ね、地下室になぜ多くのライオン女神像があったのか、そこでどのような活動が行われたかを復元していきます。

さて、簡単にエジプトの発掘調査について話をしましたが、これまでの経験からエジプトで発掘調査を行うには、様々な能力が要求されます。暑い夏に調査を行うために、知力だけでなく体力も求められますし、現地エジプト人との会話にはアラビア語、付近で調査する外国隊との会話には英語、そしてヒエログリフなどの語学力も必要です。また、基本的には集団で行う調査のために、協調性や忍耐力などが重要になってきます。これらの能力を身に着ける

のは確かに大変なことですが、一方で、砂の中から掘り起こしたモノから歴史を復元していくという大変魅力的な学問でもあります。今回来ていただいたみなさんの中から一人でも考古学を志す方が現れることを願って話を終わりにしたいと思います。

なぜ沖縄現代史だったのか

戸邊 秀明

歴史関係の学科を希望されるみなさんは、おそらく自他ともに認める歴史好きだろう。ところが私は、いわゆる歴史にはあまり興味がなく、華々しい歴史ロマンや英雄物語にはどうにもついていけなかった。しかし、そこはひねくれ者で、歴史は英雄がつくるのではない、という根拠なき直感もあり、それが私に歴史研究を諦めさせなかったようだ。私にとってはどんな英雄に感情移入するよりも、突飛な例だが、パレスチナで同じ年頃の少年がなぜ（現象的には明らか

に無謀な）戦車に向かって石を投げ続けるのか、その動機や志向を尋ねる方が切実に思われた。しかもその時の私は、民衆蜂起という「英雄的」行動には心躍らず、蜂起に至る歴史と個々人の心のはたらきについて興味を覚えた、というよりも畏怖の念を抱いた。戦車に石を投げる、その行為に現れる「感じ、考える、その仕方」（二宮宏之）をどうすれば理解できるかが、ぼんやりとではあるが、歴史研究に向かう際の私の問いとしてあったことになる。こうした変わり者にとって、早稲田の歴史学、とりわけ日本史研究の伝統はたいへんありがたかった。民衆史や社会史といわれる研究潮流を正當に認め、学問的に追求する姿勢が育まれていたからだ。

そのうえで私が現代史に導かれたのは、日本史専修に進んだ際に受けた講義の衝撃が大きい。いまでもいきいきと想い出されるが、鹿野政直先生の「日本文化史」講義には目をみはった。その講義は「近現代日本思想史」ととりあえずは括れるものの、

既成の思想史とはまったく違う。福澤諭吉や丸山真男も出てはくるが、多くは「無名」の人々の怒り、悲しみ、不安、叫び等々が、すべて当事者の目線で語られていた。そうした「ひとびと」の心のはたらきもまた歴史の全体を構成するし、それをもって語れぬ歴史にはたして意味があるのか、との強い問いかけを、先生の講義から受けとった。私はそうした歴史研究のあり方に本当に驚くとともに、やがて、こうした探究こそ歴史学でなければできないのだと考えるようになる。と同時に、一番私たちに近いはずの現代史（戦後史）こそ、実はわからないことばかりだと気づかされた。同じ言葉、同じ言い回しでも、そこに込められた感じ方、考え方はまるで異なる場合がよくある。「異文化」と突き放して考えられる前近代史と異なり、私たちの足もとに続く現代史こそ、「読める」という気易さによって、実はかえって過去の意味が理解しがたくなっているように思われた。この現代史を研究領域に選択できた自由も、早稲田の歴史学

の闊達さゆえに許された幸運だった。

とはいえ、ここから「沖縄現代史」という、私が現在まで専攻する研究領域に必然的に到達するわけではない。それは、本当に偶然としか言いようがない一回限りの選択による。大学院への進学を考えたその時、つまり一九九五年に起こったのが、在沖縄米軍兵士による少女暴行事件に端を発する沖縄県民あげての基地反対運動だった。その運動や集会には、被害者となんら縁故のない何万もの沖縄の人々が集まり、在日米軍以上に、その存在を許す日本社会を厳しく批判していた。その光景が私にはショックであった。いや正確には、驚いた自分がいたことがショックだった。その時まで、沖縄は私にとり、いわば余白でしかなかった。それでいい、現代史のなにがわかっていったのか？ このショックが、頭でかちの学生に、沖縄現代史という重い課題を選択させた。それは主體的な選択というよりも、突然「沖縄が私をつかんだ」とでも言わざるをえない経験だった。

以後、私はずっと沖縄に鍛えられるかたちで現代史研究の意義を体感してきた。民衆史や現代史には、正直、華々しさやロマンはない。いや、むしろ沖縄現代史（そしておそらく他のどの地域における民衆の現代史もまた）は、「歴史」として対象化して軽々に「おもしろさ」を語ることなど許さない経験や記憶が、この社会には充満していることを、歴史好きを名乗る私たちに教えてくれる。現代史はまだ当事者が生きておられ、その発言によっては事実が大きく覆ることもしばしばだ。しかし同時に、語りえない事実が沈黙となって露頭していることに、史料からどれだけ迫れるかを常に試されている。また現代史は研究者の独擅場ではなく、書き手も読み手も広く社会に開かれているがゆえに、その意義や責任を社会に問われる緊張感のなかで研究は続く。だからこそ、たとえば米軍基地を見て、日米安保をめぐる国際関係を連想するのはなく、この金網の下にあった人々と生活はどうなったのだろうと思ひ至るかどうかい

求められるのは歴史的知識よりも、そうした想像力なのだ。その緊張感のなかで既成の歴史観念を捨て去る体験こそ、現代史研究の「魅力」ではないだろうか。

いったん違った方向から歴史が見えると、自明として見過ごしてきたものに潜在する歴史的な経緯や意味が、いままでとはまったく異なる相貌で姿を現す。いわば「見えないものを見る」ことができるようになる。しかもその魔法の眼鏡は、三次元ばかりか四次元をも見通せ、むしろその最後の次元である時間＝歴史によって、「ものを見る」力を与えてくれる。ぜひそうした眼鏡を大學生活のなかで、一人一人が作っていただきたい。この戸山で歴史を学ぶことこそ、そのためのもっとも恵まれた近道であることは、私のささやかな経験からお約束できるはずだ。

わたしと東洋史

本間 寛之

みなさんが東洋史・アジア史に関心を持たきっかけは何だったのでしょうか？ 例えば「三国志」、という人は多いのではないのでしょうか。正史の『三国志』からという人は稀ですが、小説や漫画、アニメ、テレビゲームにもなっていますから、結構「はまった」方も多いのではないかと思います。

私の場合はNHKの「シルクロード」という番組の影響が大きいようです。といっても放送時に見ていたわけではなく、父親がこの番組の影響でシルクロードへの旅行を計画、ツアーに参加しまして、私もくっついていったわけです。初めて日本以外の国へ行ったわけですから、その印象は強烈でした。特に思い出深いのがトルファンで、観光名所の一つである交河故城も当時は整備途上であちこち自由に見て回ることがで

きましたし、あるいは宿泊先のトルファン賓館で停電に見舞われ、思わぬ満天の星空を見たりしたものです。

これで中国史やシルクロードに関心を持つようになった私は、専修進級時に東洋史を選びました。そして、卒論のテーマを考える中で、トルファンの古墳などから出土したトルファン出土文書という古文書群を知ったのです。更にトルファンの歴史を改めて調べなおすうちに、独立国であった時代に興味を抱くようになりました。ご存知のように、今のトルファンは広大な中国という国の一部分です。しかし、歴史的にはトルファン盆地だけで高昌国という一つの独立国を形成していた時期があって、年代と言うと五世紀から七世紀です。

この高昌国は漢人が建てた国なのですが、資料的な制約もあって、かつてはこの高昌国は中国王朝を模倣したものと考えられていました。しかし、独立国であれば、その国なりの特色があるはずです。また、滅亡時の人口が三万七千人と記録されているの